

荒野泰典

「荒野です。お三方のお話をとても興味深く伺いました。全体として三つのお話を、まさに「現代史研究の課題と方法」という特集のテーマにふさわしいご報告だと思えました。ただ、私は現代史の専攻ではないので、専門的な事柄についての発言はできません。そこで、申し訳ないのですが、すこし違った角度から発言させていただきます。それは、お話を伺っているうちに、歴史はすべて現代史であるという、昔からよく言われていることを思い起こさせられた、ということに関わったことです。

お三方のお話を私は、自分の研究でやっていること、やってきたことを思い起こしながら、あるいは、それとクロスさせながら伺いました。私は近世の国際関係を研究しているんですが、それを思い起こしながら、それらが今お話しいただいた、現代の生々しい問題とも、何と言いますか、

通じるところが多々あると言いますか。現代の話を伺いながら、それを媒介にして、自分がやってきたことがいっそうリアルな問題として自分のなかで立ち上がってくると言いますか、あるいは、現状と自分の研究を介して、人類史とかというそういうふうなことまで考えさせられる、そんな感じでお話を伺ってきました。

例えば、明田川さんのお話です。ちょっと前にかなり問題になりました、もちろん今でも問題ですけれども、普天間基地の問題を思い浮かべながら伺いました。報道される日米間・政府沖縄間などのいろんなやりとりを、私などは非常に虚しい思いで聞いているわけです。沖縄県民の負担を問題にするんだったら、やっぱり地位協定を問題にしなければならないだろうというふうに思っているのですが、その問題に政府やマスコミは一向に触れようとしない。今

日のお話では、密約の問題でまさにそれはどんぴしゃで出てきて、ちよつと身震いするような思いでお話を伺いました。最近の私は、自分の研究で幕末史で開港期の問題に取りくみはじめ、今は日米和親条約を読んでいます。私はずつと近世の国際関係の研究をやってきたので、和親条約の条文を読んでも、近代史の人とは別の読み方をしてしまう、どうも従来議論されてきたこととは別の要素が見えてしまうんですね。一言でいえば、和親条約の条文そのものに、幕府の主体性、もっと言えば、近世の国際関係の在り方というものが非常に色濃く反映している、あるいは、表現されている。幕末における幕府の主体性については、最近は色々な形で言われ始めましたけれども、かつての通説だと、和親条約・修好通商条約は、米国の、ペリーやハリスにごり押しされて結ばされた不平等条約というふうな位置づけが非常に強いと思うんですけども、とんでもない。それぞれの条約の一条、一条に日本側の、幕府の主体性がしっかりと出ています。だから、よくあそこでとめたなっていう、何かこういいうい方をしているのかどうか、幕府も大したものだなと、そういう非常に国際的に長けた対応を日本側にしたなというふう思うんですね。

それと、今日伺った密約の話なんかを比べてみると、日

本側の主体性っていうとどこにあるんだという思いに駆られます。例えば米軍関連のいろんな費用の負担を、思いやり予算とかというふうに言いかえて、何とか国民によく見せる、うわべを取り繕う程度のことしかできていなんじゃないかというふうに思ってしまうわけです。外交の場でも切り結ぶときの主体性というのはどういふものなんだろうか、あるいはどのようにすれば保つことができるのだろうか、というようなことを、最近私が始めた和親条約の研究などを思い起こしながら、伺いました。

鈴木さんのお話は、組織と権力の関係ということでした。私は近世の初めのこともやっています、お話を伺いながら、長崎の改宗事業のことを思い起こしました。よく知られているように、長崎には一六三〇年代までは大体三万人から四万人人口があつたんですが、ほとんどキリシタンだったんですね。それが幕府の切り崩しにあつて、もう本当に雪崩式に改宗していくわけです。そのきっかけは、どう見てもキリスト教徒内の分裂というか利害の対立なんですね。もちろん、それが表面化する契機として、幕府の圧力が大きな要素ではあります。圧力をかけ、長崎市民の間に生じた矛盾、裂け目に、幕府権力は巧妙に入り込んでいくんです。むき出しの暴力（武力の発動）で押しつぶすと

いうよりは、様々な手を使って自壊を待つ、と言えはいいのでしうか。そのようにして、キリシタンの都市長崎は、あつげなく改宗してしまふのです。

そういうことを思い起こしながら今日のお話を伺っていると、何か一種の普遍的な、組織と権力のあり方のようなものが、非常によく見えてくる気がします。

沼尻さんのお話を伺っていると、歴史学は人と自然の関係性という契機、あるいは、テーマを組みこむ必要がある、ということを変更して痛感させられました。これもペリーの関係なんですけれども、なぜ日本の「開港」(私は通説の「開国」という言説には反対し、「開港」ととらえなおすべきと考えています)は、ペリー艦隊によつたのか、なぜ彼は来たのか、ということから、捕鯨の研究もやっています。そうすると、だんだん人類史と言うか、鯨と人の関係ということなどを通じて、人類史とか、環境史とか、そういう問題も考えなきやいけないというふうに考え始めています。そういう視点から考えると、「産業革命」と一般に言われている事柄が起きているときに、同時に、捕鯨というのは非常に盛んになるわけです。世界中、欧米の人たちが、なかでも米国の捕鯨船が中心に獲るわけですけれども、米国だけでなく、ヨーロッパ諸国は、多かれ少なかれ獲つて

いて、そのなかで米国のシェアが相当に高かったというだけのことです。これは、見落とされがちですが、重要なことだと私は考えています。こうして、欧米の捕鯨船が、特に、米国のそれが世界中に展開していく。その様子を見てみると、どう考えても資本主義の発展、産業革命というところと捕鯨というのは、どっかで構造的に関連していると考えざるをえない。その関連性をまだきちんと構造的に解明した仕事ってないんじゃないかと私は思っておりますけれども、そうすると、資本主義の成立とか、産業革命ということも、実は人間と自然の関係性ということに置き直して考える必要があるんじゃないかというふうに考え始めております。捕鯨の研究を仲間と始めて10年あまりになりましたが、最近はそのようなことも考えなければならなくなつてきておりまして、そんな折に、今日の沼尻さんの問題提起に接して、非常に心強く思い、かつ、興味深く伺つた次第です。

まさにすべての歴史が現代史だということ、また、現代の歴史を研究するということは、人類史全体に通じていくということと、その関係性というの痛切に感じさせていただき、非常に知的興奮を味わわせていただきました。実は最後に、会長あいさつのときに言わせていただこうかと

講評（荒野）

一生懸命メモをしながら準備していたことなんですけれども、以上のような感想も持ちました。どうもありがとうございます。

（本学文学部教授・本学会会長）